

看護学科，高齢者看護学実習における実習目標達成度と実習満足度の実態

中澤 明美，山田 ノリ子，山下 菜穂子

了徳寺大学・健康科学部看護学科

要旨

本研究は，本学看護学科における高齢者看護学実習の実習目標達成度と実習満足度の実態を明らかにすることを目的とした。対象は，高齢者看護学実習を履修した3年次生で研究の同意が得られた者92名である。高齢者看護学における病院実習と高齢者施設実習終了後に実習要項に掲載されている実習目標について「十分達成できた」から「全く達成できなかった」の4段階で，実習満足度については「とても満足」から「全く不満足」の4段階での自己評価とした。結果，実習目標ごとに達成度に違いがあり達成度の高い目標と低い目標が明らかになった。また，実習満足度は，概ね高い評価であったが，病院実習と施設実習で若干の差異がみられた。本学看護学科では，高齢者看護学実習が始まり3年が経過し，実習目標や実習方法の見直しや評価の時期にきている。今回の調査結果から今後の高齢者看護学実習の構築に関する示唆を得ることができた。

キーワード：高齢者看護学実習，実習目標達成度，実習満足度

The actual situation on the practice goal attainment and the practice satisfaction level in elderly nursing practice

Akemi Nakazawa, Noriko Yamada, Naoko Yamashita

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

This study aimed to clarify the actual situation on the practice goal attainment and the practice satisfaction level in elderly nursing practice in Department of Nursing of Ryotokuji University. Subjects who agreed to participate in this investigation, were ninety-two persons of 92 third year students completed courses of elderly nursing practice. After the hospital practice and the elderly facilities practice, the students had a self-assessment with regards practice goal attainment which was divided into four scales from “completely achieved” to “totally non-achieved,” based on essential points of elderly nursing practice, and for the satisfaction level which was divided into four scales from “very satisfied” to “totally dissatisfied”. The results showed differences in attainment of each practice goal, and revealed the existence of high goals attainment and low goals attainment. Also, practice satisfaction levels were generally high however they showed slight differences in the hospital practice and the facilities practice. Three years have passed since the beginning of elderly nursing practice in the Department of Nursing at Ryotokuji University, and we should revise and evaluate for practice objectives and practice methods. We got a suggestion on the construction of future elderly nursing practice from the results of this study.

Keywords: elderly nursing practice, practice goal attainment, practice satisfaction level

I. はじめに

急速に伸展する高齢社会を見据え、1990年、保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則が改正され、それまで成人看護学の一部として教授されていた老年期の看護が独立し「老人看護学」が創設された。その後、1998年の改正により「老年看護学」と名称が変更され現在に至っている。(本学看護学科では「高齢者看護学」の科目名で教授しているため以下、本学の教育内容に関することは「高齢者看護学」と記載する。) さらに、2009年の指定規則改正では「老年看護学」の教育内容として看護の対象である高齢者を生活機能の観点からアセスメントし看護展開できる能力の育成が重要視され、臨地実習4単位の履修が義務付けられた。高齢社会の進展に伴い高齢者看護に対する社会的役割と期待は大きく、看護基礎教育の責任は重い。

高齢者看護が実践される場は、病気の治療を目的とした病院だけではない。高齢者が生活する家庭とその地域、介護保険における高齢者施設など様々である。そこで、本学看護学科では、高齢者看護学実習を「入院加療する高齢者の看護」として病院実習を3単位、「施設で生活する高齢者の看護」として高齢者施設実習を1単位とし計4単位の实習を行っている。「高齢者看護学実習」は3年次後期に4単位の履修が配置され実習開始から3年が経過した。実習目標や実習内容などを評価し教育内容の見直し準備の時期にある。

老年看護学実習に関する先行研究では、老年看護学実習での学びを学生のレポート記述内容から分析したものが多くみられるが¹⁻⁴⁾、いずれも学生は実習を通して加齢変化や高齢者の特徴を理解し、対象の尊厳を守ること、高齢者や家族とのコミュニケーションや自立を目指したケアについてなどの学びを深めていることが明らかになっている。これら先行研究の結果は、本学高齢者看護学の実習目標とも関連している。学生は、実習目標を十分に達成したという実感を持っているのだろうか。杉森らは⁵⁾「講義・演習・実習といういずれの授業形態においても授業の目的・目標を到達できているかという学習成果に加え、学生に満足いく授業であったかという視点を重要視する」と述べており、学生の学習目標の達成度と学生の主観的満足感を捉えることの重要性を説いている。

そこで、3年間の高齢者看護学実習における教育の総括として、各実習目標の達成度と学生の実習満足度を明らかにし今後の教育内容の構築に向けて示唆を得たいと考えた。

II. 研究目的

本学看護学科における高齢者看護学実習の実習目標達成度と実習満足度の実態を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 協力者

看護学科3年次生で、高齢者看護学実習を履修した学生のうち、研究協力の同意が得られた者、高齢者看護学実習 I 92人、高齢者看護学実習 II 90人である。

2. 高齢者看護学実習の概要

1) 高齢者看護学実習全体の目的

高齢者の特性を理解し、高齢者の人権を守るとともに、あらゆる健康レベルにある対象に適切な看護を実践できる基礎的能力を修得する。

2) 高齢者看護学実習Ⅰ（以下、病院実習とする）

(1) 実習目標

- ①加齢に伴う変化や健康障害が日常生活に及ぼす影響について理解できる。
- ②高齢者の疾病や障害のレベルに応じた看護援助ができる。
- ③高齢者の個別性を踏まえた看護過程の展開ができる。
- ④高齢者の疾病・療養に対する社会資源の活用について理解できる。
- ⑤高齢者の人生観・価値観・生活信条を尊重した関わりができる。
- ⑥高齢者やその家族とよりよい人間関係を築くことができる。
- ⑦高齢者看護のあるべき姿について考察することができる。

(2) 実習方法

総合病院の内科，脳神経外科，整形外科などの病棟で実習する。65歳以上の高齢者を1人受持ち看護過程を展開し看護を実践する。

3) 高齢者看護学実習Ⅱ（以下、施設実習とする）

(1) 目標

- ①加齢と健康障害による生活への影響を理解する。
- ②高齢者およびその家族とコミュニケーションをとり，円滑な人間関係を築くことができる。
- ③高齢者の健康状態を把握し，生活の質の向上をめざした援助ができる。
- ④保健医療福祉チームの一員として看護師の役割を理解し，他職種との連携について学ぶ。
- ⑤高齢者健康とよりよい生活を支えるための社会資源とその活用の実際を知る。
- ⑥施設で生活する高齢者の援助を通して，高齢者看護における倫理的課題を明らかにすることができる。

(2) 方法

特別養護老人ホーム，介護老人保健施設，介護付き有料老人ホームのいずれかで実習し施設で生活する高齢者との関わりを通して対象理解や施設看護の役割を学ぶ。

3. 方 法

1) データ収集期間

平成27年9月～平成28年2月までである。

2) 調査内容・方法

調査内容は，高齢者看護学実習要項に掲載されている各実習目標について「十分達成できた」～「全く達成できなかった」の4段階で自己評価し，実習満足度は，「とても満足」～「全く不満足」の4段階で自己評価し，なぜそのように評価したのか理由を記載するように依頼した。

調査方法は，病院実習・高齢者施設実習それぞれ終了後，翌日の学内実習日に調査用紙（資料1.2）を配布し，無記名であること，成績評価とは一切関係ないこと，調査表の提出は強制ではないことを説明し，記載後は所定の箱に入れてもらい回収した。

3) 分析方法

病院実習は、4か所の病院ごとに単純集計した後に全体集計をした。施設実習も同様に5か所の施設ごとに単純集計した後に全体集計をした。

4. 倫理的配慮

本研究は、了徳寺大学生命倫理委員会の承認を得て行った(承認番号：2823)。研究協力は強制ではないこと、無記名で個人は特定されないこと、科目成績評価とは一切関係ないこと、結果は紀要などにて公表することなどを口頭と文書で説明し同意を得た。

IV. 結果

1. 実習目標の達成度

1) 高齢者看護学実習Ⅰ（病院実習）

病院実習は、92人が履修し92人全員から同意と回答が得られた。ただし、質問項目によって未記入の者がいたが、これは無効回答とせず「記入漏れ」として集計した。実習目標と達成度の割合を表1、図1に示した。最も達成度の高い実習目標は「①加齢と健康障害による生活への影響を理解する」「②高齢者の疾病や障害のレベルに応じた看護援助ができる」であり、91人（99%）の学生が「十分、またはやや達成できた」と評価していた。「やや達成できなかった」と答えた学生は1人だった。その理由として「事前学習が十分でなく高齢者の排泄パターンの特徴を理解していなかったことを指導者に指摘され、達成とはいえない」「受持ち患者さんの自立度に合わせた清拭の方法を見出すことが難しかった」との記載があった。達成度の低い実習目標は「⑥高齢者やその家族とよりよい人間関係を築くことができる」であり、19人（約20%）の学生が「やや達成できなかった」または「全く達成できなかった」と回答していた。その理由としては「実習中、家族の方とお会いできなかった」と15人の学生が記載していた。最も達成度の低かった実習目標は「④高齢者の疾病・療養に対する社会資源の活用について理解できる」であり、28人（約30%）の学生が「やや達成できなかった」または「全く達成できなかった」と回答していた。その理由としては「患者さんの介護保険の活用状況など十分情報収集できていなかった」「実習中に社会資源の活用と直接関わらず学ぶ機会がなかった」等の記載があった。一方、A総合病院では27人が実習しそのうち17人が「退院調整の実際についての臨床講義があり理解できた」との記載があった。

2) 高齢者看護実習Ⅱ（施設実習）

施設実習は、91人が履修し90人から同意と回答が得られた。病院実習同様質問項目によって未記入の者がいたが、これは無効回答とせず「記入漏れ」として集計した。実習目標と達成度の割合を表2、図2に示した。最も達成度の高い実習目標は「①加齢と健康障害による生活への影響を理解する」で、90人全員が「十分、またはやや達成できた」と回答し「達成できなかった」と答えた学生はいなかった。達成度の低い実習目標は「③高齢者の健康状態を把握し、生活の質の向上をめざした援助ができる」であり、9人（約10%）の学生が「やや達成できなかった」または「全く達成できなかった」と回答していた。その理由としては8人の学生が「生活の質の向上を目指した援助の実際は理解できたが、見学が中心であり自分自身が実践したことは少なかった」と記載していた。最も達成度の低かった実習目標は「⑤高齢者健康とよりよい生活を支えるための社会資源とその活用の実際を知る」であり、26人（約29%）の学生が「やや達成で

きなかった」と回答した。その理由としては「実習中、社会資源の活用の実際を見ることはなくわからなかった」「活用の実際は学べなかった」との記載がみられた。

表1. 高齢者看護学実習Ⅰ（病院実習）実習目標と達成度

実習目標		十分達成できた	やや達成できた	やや達成できなかった	全く達成できなかった	記入漏れ	合計
1. 加齢に伴う変化や健康障害が日常生活に及ぼす影響について理解できる。	人数	57	34	1	0	0	92
	%	62.0%	37.0%	1.0%	0	0	100%
2. 高齢者の疾病や障害のレベルに応じた看護援助ができる。	人数	57	34	1	0	0	92
	%	62.0%	37.0%	1.0%	0	0	100%
3. 高齢者の個性を踏まえた看護過程の展開ができる。	人数	49	40	2	0	1	92
	%	53.3%	43.5%	2.2%	0	1.0%	100%
4. 高齢者の疾病・療養に対する社会資源の活用について理解できる。	人数	18	46	26	2	0	92
	%	19.5%	50.0%	28.3%	2.2%	0	100%
5. 高齢者の人生観・価値観・生活信条を尊重した関わりができる。	人数	47	37	8	0	0	92
	%	51.1%	40.2%	8.7%	0	0	100%
6. 高齢者やその家族とよりよい人間関係を築くことができる。	人数	38	34	16	3	1	92
	%	41.3%	37.0%	17.4%	3.3%	1.0%	100%
7. 高齢者看護のあるべき姿について考察することができる。	人数	54	35	2	0	1	92
	%	58.7%	38.1%	2.2%	0	1.0%	100%

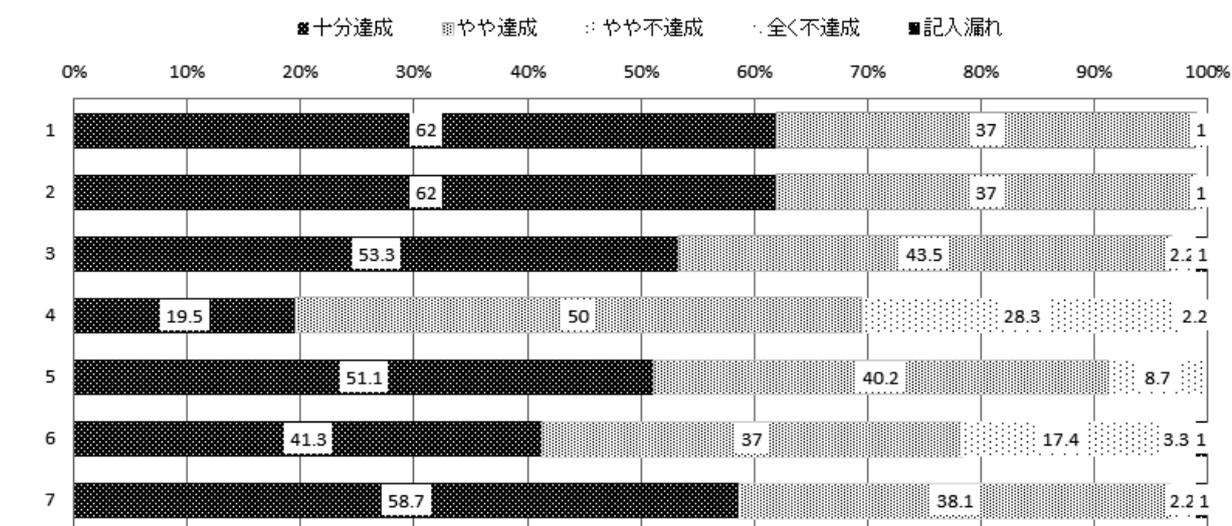


図1. 高齢者看護学実習Ⅰ（病院）実習目標別達成度の割合

表2. 高齢者看護学実習Ⅱ（高齢者施設実習）実習目標と達成度

実習目標		十分達成できた	やや達成できた	やや達成できなかった	全く達成できなかった	記入漏れ	合計
1. 加齢と健康障害による生活への影響を理解する。	人数	40	50	0	0	0	90
	%	44.4%	55.6%	0	0	0	100%
2. 高齢者およびその家族とコミュニケーションをとり、円滑な人間関係を築くことができる。	人数	36	51	3	0	0	90
	%	40.0%	56.7%	3.3%	0	0	100%
3. 高齢者の健康状態を把握し、生活の質の向上をめざした援助ができる。	人数	32	48	8	1	1	90
	%	35.6%	53.3%	8.9%	1.1%	1.1%	100%
4. 保健医療福祉チームの一員として看護師の役割を理解し、他職種との連携について学ぶ。	人数	52	36	2	0	0	90
	%	57.8%	40.0%	2.2%	0	0	100%
5. 高齢者健康とよりよい生活を支えるための社会資源とその活用の実際を知る。	人数	20	44	26	0	0	90
	%	22.2%	48.9%	28.9%	0	0	100%
6. 施設で生活する高齢者の援助を通して、高齢者看護における倫理的課題を明らかにすることができる。	人数	42	38	7	1	2	90
	%	46.7%	42.2%	7.8%	1.1%	2.2%	100%

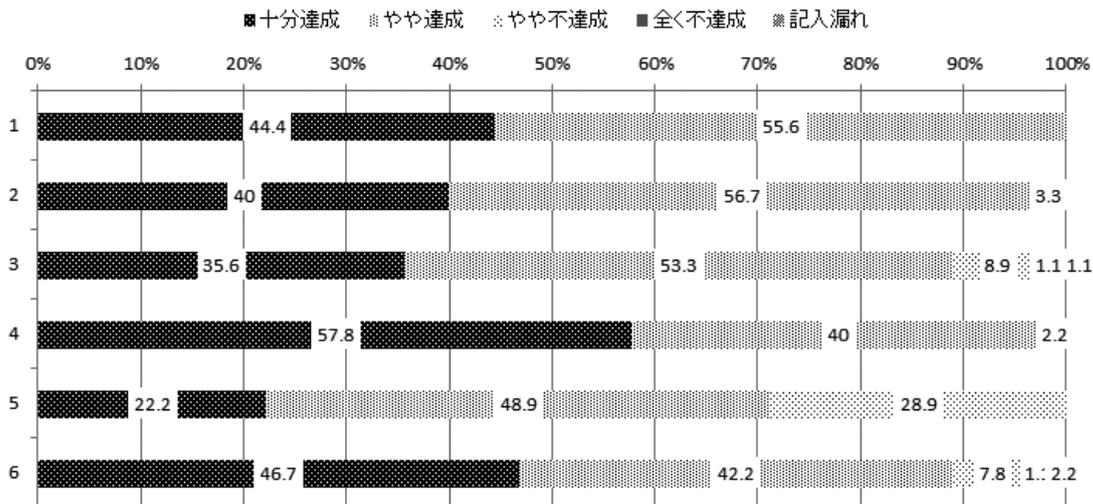


図2. 高齢者看護学実習Ⅱ（施設）実習目標別達成度の割合

2. 実習満足度

1) 高齢者看護学実習Ⅰ（病院実習）

実習満足度は、記載漏れの学生はいなかった。満足度の割合を表3、図3に示した。91人（約99%）の学生が実習全体を通して「とても満足」「やや満足」と回答し、「やや不満足」と答えた学生は1人（約1%）だけだった。1人の学生はその理由を「3週間の実習の中でもっとできることがあったのではないかと思う。例えば排痰方法の指導パンフレットを作成しもっとわかりやすく排痰指導をするなど…それを思うと満足とはいえない」と記載していた。「とても満足」と回答した60人の学生のうち46人が「指導者、教員、病棟スタッフから受け入れてもらいよい学びができた」と記載しており、その他「受持たせて頂いた患者さんから多くの励ましを頂き学ばせてもらった」「はじめはとても不安で上手くいかないこともあったけれど、自分に足りないものは何か考え、多くの学びを得て、満足感というより達成感のある実習でした」「たくさんのかんことを学び何より実習が楽しいと心から思えた」など実習に関して肯定的感想が多くみられた。

2) 高齢者看護学実習Ⅱ（施設実習）

施設実習も記載漏れの学生はいなかった。満足度の割合は表4、図4に示した。85人（約95%）の学生が「とても満足」「やや満足」と回答し、「やや不満足」と答えた学生は5人（約5%）であり「全く不満足」と回答した学生はいなかった。「やや不満足」と回答した学生は、その理由を「実習時間が短く利用者の方の人生や生活背景まで知ることはできなかった」「利用者の情報がとれないまま関わることが不安だった」「指導者が毎日交代し戸惑った」「施設における看護師の役割を十分理解したとは言い難い」などの記載があり、実習に対しやや不全感を感じていることがわかった。一方で「施設と病院の違いについて考えながら実習し学ぶことが多かった」「自立度の高い高齢者から終末期の方まで様々な場面を見せて頂き、学びの多い実習だった」「自分たちでレクリエーションを企画し、高齢者の反応を見ながら進め楽しい実習だった」「認知症のある高齢者との関わり方など様々なことが学べた」と病院実習だけでは得ることができない高齢者看護の視野を広げることができ、満足度につながっていることもわかった。

表3. 高齢者看護学実習Ⅰ（病院）満足度

	とても満足	やや満足	やや不満足	全く不満足	n=92 合計
人数	60	31	1	0	92
%	65.2%	33.7%	1.1%	0%	100%

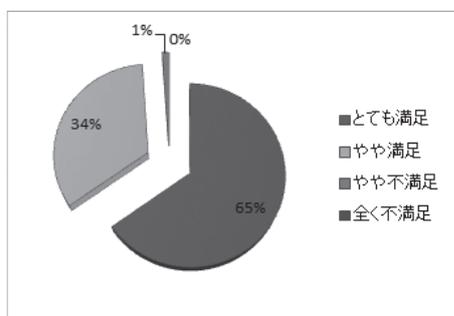


図3. 高齢者看護学実習Ⅰ（病院）満足度割合

表4. 高齢者看護学実習Ⅱ（施設）満足度

	とても満足	やや満足	やや不満足	全く不満足	n=90 合計
人数	51	34	5	0	90
%	56.7%	37.8%	5.5%	0%	100%

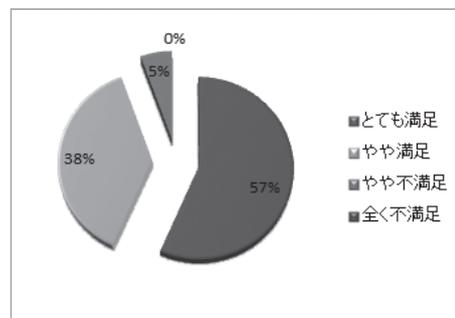


図4. 高齢者看護学実習Ⅱ（施設）満足度割合

V. 考察

1) 目標達成度の項目の相違

大淵は⁶⁾、老年看護学教育の目指すものとして、対象である高齢者の理解と老年看護の質の向上を挙げている。そのためには高齢者の健康状態を的確にアセスメントする力、高齢者と家族に対する専門的判断に基づく看護実践の提供、保健医療福祉関連職種との連携、調整力が必要と述べている。木立らは⁷⁾、老年看護学実習目標として、高齢者の理解、生活の援助、コミュニケーション、高齢者に関わる法制度の理解、他職種連携、認知症高齢者の理解を挙げている。本学看護学科の高齢者看護学実習目標は、これらの内容をほぼ網羅しており目標としては妥当と考える。

目標達成度の高かった項目は、病院実習では「加齢に伴う変化や健康障害が日常生活に及ぼす影響を理解する」「高齢者の疾病や障害のレベルに応じた看護援助ができる」であり、施設実習では「加齢と健康障害による生活への影響を理解する」だった。これは、いずれも加齢変化や疾病が生活にどう影響しているのか、という視点から対象をみる必要があるとされる。高齢者看護学領域では、生活機能からみた老年看護過程⁸⁾を用いて教授している。これは「生活行動モデル」を用いて文字どおり高齢者の生活に焦点を合わせて対象を理解し、看護実践するためのモデルである。高齢者を清潔、排泄、活動（休息）、食事（栄養）など生活の視点からアセスメントすることで生活のどこに不足がありどの様な支援が必要かを導いていくことができる。この看護過程の展開により上記の実習目標達成度は高かったと推察される。一方、達成度の低い目標は病院実習では「高齢者の疾病・療養に対する社会資源の活用について理解する」施設実習では「高齢者の健康とよりよい生活を支えるための社会資源とその活用の実際を知る」であった。いずれも高齢者看護における社会資源の活用について学ぶことを目標としているが、実際には学べていない学生が多いことが分かる。病院実習では、疾病の治療が中心となり、高齢者が退院後にどこでどの様な生活をするのか、それを誰が支えるのかというアセスメントが十分でないと推察される。また、施設実習では、施設入所そのものが社会資源を活用しての暮らしであるが、どのような経緯や審査、手続きを経て入所に至ったのか情報収集と理解が不足していることが分かった。これには、事前学習と実際の患者を結び付けての意図的な指導が必要である。ただしこの学習項目に関しては高齢者看護学のみで完結するものではなく、地域での療養生活を支える在宅看護学との学習項目とも関係してくるため、他看護学領域との学習の

互換性を探っていかなければならないと考える。

2) 実習満足度に影響を及ぼす要因

実習満足度に関する先行研究では、片山らの報告がある⁹⁾。臨地実習目標達成度評価と実習満足度の関連をみているが、満足度と評価には有意な相関はなかった。一方、辻村らは¹⁰⁾基礎看護学実習での実習満足度と学生指導体制との関連を指導体制に変化のあった前後の年で比較考察し、指導体制の充実が満足度と関係するとの示唆を得ている。今回の調査では、数名の学生以外の全ての学生が高齢者看護学実習を終え、実習に対する満足感を得ていた。実習満足度に影響する要因の調査はしていないため、何が高齢者看護学実習満足度を高めたのかは、明らかにはできない。ただし、なぜそのように評価したのか、自由記述欄のコメントよりその手がかりをつかむことができる。その一つとして「指導者、指導教員、病棟スタッフ」の関わりが挙げられる。学生は、多くの不安と緊張の中で実習している。そのため、学生を受け入れる病棟の雰囲気や指導者や教員の関わりは重要である。緊張感や実習に対する不安感を和らげかつ適切な指導により学生の学びを支える人的環境が学生の実習満足度に与える影響は大きいと推察される。次に、受持ち患者との関わりがある。コミュニケーションをとりよりよい人間関係を築くことができた学生は、患者から多くのことを学ばせて頂いていることに気づき看護の楽しさや醍醐味を感じ満足度に繋がっている。また、片山らの報告⁹⁾では、実習目標達成と実習満足度の関連は見いだせていないが、実習目標を達成し学びを得たことは達成感、満足感に繋がると思われる。しかし、今回の調査では、何が学生の満足度に影響したのかその要因については明らかにはできない。今後の課題としたい。

3) 今後の高齢者看護学実習指導に関する課題

本学看護学科では、高齢者看護学実習が開講され3年が経過した。学生が捉えた実習目標の達成状況と実習満足度の実態を探り今後の教育に対するいくつかの示唆を得ることができた。まず、病院実習では、生活機能の視点から対象をアセスメントすることの重要性は学習できている。一方で、高齢者の看護は入院中の治療・処置を実践するだけでなく入院前の生活状況を把握し、退院後に本人や家族はどのような生活を望んでいるのか、どのような課題があり、看護師としてどう解決できるのか、を考え看護しなければならない。そこに高齢者看護の役割があるが十分には学べていない現状がみえてきた。その役割を果たすには様々な社会資源や制度に関する知識が必要となってくる。高齢者看護学概論や高齢者看護方法論の講義はもちろんのこと、在宅看護学など関連する他領域との教育の連携が必要になってくると思われる。次に、施設実習は4日間という実習期間に合わせた実習目標の設定が重要となる。学生が自らケアを提供実践する機会は少なく見学が中心となるため見学を通して何を学ぶのか、より具体的な学習目標の設定が必要となる。さらに、高齢者施設においては今後ますます認知症高齢者への看護実践能力が求められるだろう。木下らは¹¹⁾、認知症グループホーム実習においてユマニチュードの理論を導入して学習効果をあげている。学内で学んだ知識を実習で実践することで技術として身につけていく。今後はこのような施設実習のあり方を検討したい。さらに、今回の調査は、学生の主観的自己評価であり、教員評価との関連についてはわからない。実習目標のさらなる見直しや調査項目間の関連性の分析など今後の課題としたい。

謝辞

調査にご協力いただいた学生の皆様に心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 隈部直子, 田中康代, 梶原身和子 (2011) 老年看護学実習 I における学生の学び－実習後振り返りレポートの内容を分析して－. 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌. 7, 81-84.
- 2) 杉野朋子, 丹羽さよ子 (2011) 「老年看護学実習」における学びの分析－学生の実習レポートの分析より－. 鹿児島大学医学部保健学科紀要. 21, 13-19.
- 3) 清水留美, 実盛美幸, 羽井佐米子 (2012) 高齢者施設別特徴における老年看護学実習の学びと課題. 旭川荘研究年報. 43 (1), 62-69.
- 4) 安田千寿, 北村隆子, 畑野相子 (2012) 学生の実習経験と老年看護実習における学びの特徴－テキストマイニングによる自由記述回答の分析－. 人間看護学研究. 10, 95-100.
- 5) 杉森みど里, 舟島なをみ (2012) 看護教育学第5版, 医学書院, 東京. 288.
- 6) 大渕律子 (2009) 老年看護学の看護実践能力を高める教育のあり方. 三重看護学誌. 11, 1-8.
- 7) 木立るり子, 工藤恵, 米内山千賀子 (2007) 老年看護学実習における自己評価項目の開発に向けて. 弘前大学保健紀要. 6, 11-22.
- 8) 山田律子 (2015) 生活機能からみた老年看護過程第2版, 医学書院, 東京. 3.
- 9) 片山由美, 奥津文子 (2003) 臨地実習目標達成度評価と実習満足度との関連. 京都大学医療技術短期大学部紀要. 23, 33-42.
- 10) 辻村弘美, 中村美香, 桐山勝枝ほか (2015) 基礎看護学実習における学生実習満足度と学生指導体制に関する考察. 群馬保健学紀要. 36, 21-29.
- 11) 木下香織, 古城幸子 (2015) 認知症グループホームの臨地実習に導入したユマニチュードの効果－看護学生がとらえた入所者の反応からの評価－. インターナショナルNursing Care Research. 14 (2), 145-153.

(平成28年11月25日稿)

査読終了日 平成28年11月29日

平成27年度 高齢者看護学実習Ⅰ 実習終了時アンケート		【 1 . 2 】		ケール目 / 【 病院 】	
高齢者看護学実習Ⅰお疲れさまでした。3週間の実習について以下の質問に回答をお願いします。 ※該当する段階に○をして、その理由を記述して下さい。					
回答者	十分達成 できた	やや達成 できた	やや達成 できなかった	全く達成 できなかった	
1. 実習目標の到達度について	A	B	C	D	
1)加齢に伴う変化や健康障害が日常生活に及ぼす影響について理解できた	A	B	C	D	
<その理由>					
2)高齢者の疾病や障害のレベルに応じた看護援助ができた	A	B	C	D	
<その理由>					
3)高齢者の個別性をふまえた看護過程の展開ができた	A	B	C	D	
<その理由>					
4)高齢者の疾病・療養に対する社会資源の活用について理解できた	A	B	C	D	
<その理由>					
5)高齢者の人生観・価値観・生活信条を尊重した関わりができた	A	B	C	D	
<その理由>					
6)高齢者とその家族とよりよい人間関係を築くことができた	A	B	C	D	
<その理由>					
7)高齢者看護のあるべき姿について考察することができた	A	B	C	D	
<その理由>					
2. 実習全体に対する満足度について	とても満足	やや満足	やや不満足	全く不満足	
<その理由>					
	A	B	C	D	

平成27年度 高齢者看護学実習Ⅱ 実習終了時アンケート		【 1 . 2 . 3 . 4 】		ケール目 / 施設名【 〃 】	
高齢者看護学実習Ⅱお疲れさまでした。1週間の実習について以下の質問に回答をお願いします。 ※該当する段階に○をして、その理由を記述して下さい。					
回答者	十分達成 できた	やや達成 できた	やや達成 できなかった	全く達成 できなかった	
1. 実習目標の到達度について	A	B	C	D	
1)加齢と健康障害による日常生活への影響を理解することができた	A	B	C	D	
<その理由>					
2)高齢者や家族とコミュニケーションを取り円滑な人間関係を築くことができた	A	B	C	D	
<その理由>					
3)高齢者の健康状態を把握し生活の質の向上を目指した援助ができた	A	B	C	D	
<その理由>					
4)保健医療福祉チームの看護師の役割を理解し、他職種との連携について学べた	A	B	C	D	
<その理由>					
5)高齢者の健康とよりよい生活を支えるための社会資源の活用の実態を知った	A	B	C	D	
<その理由>					
6)施設で生活する高齢者の現状を通して、高齢者看護における倫理的課題について考えることができた	A	B	C	D	
<その理由>					
2. 実習全体に対する満足度について	とても満足	やや満足	やや不満足	全く不満足	
<その理由>					
	A	B	C	D	